言語行動を構成する要素とその機能
－出会いのあいさつを中心に－

土屋 頼子

キーワード：出会いのあいさつ、構成要素、制約的条件、定型、準定型

1．本稿の目的

出会いの場面におけるあいさつの言語行動研究では、いわゆる代表的な「あいさつ言葉」に対象を限定して、その変種や待遇表現との関わり、あるいは談話上での機能が考察されている。しかし、このように対象を規定すると、下記のように「あいさつ言葉」が用いられなくとも、実質的にはあいさつが行われているような例は、考察対象からしばしば除外される。

例(1)（背後から声をかける）「相変わらず元気そうね」－「あら、○○さん！」

例(2)（待ち合わせの場所で）「ごめんね、待った？」－「おそいよ、○○ちゃん！」

これは、従来の研究の多くが「あいさつ言葉によるあいさつが生じた場合」のみを扱い、またその前提で調査や分析が行われてきたことと関係している。しかしその場合、対象を形式で画一的に限定するために、現実の出会いの言語行動を十分に反映しているとは言いがたい。(1)(2)の例のように、実際の言語行動が形式・内容共に多種多様である以上、単に「あいさつ言葉」とみなされる言語形式とその変種の総体からあいさつを規定するのは不可能である[1]。

本稿では、あいさつの言語行動をこれらの例も含めた現象であることを認識した上で、どのような言語行動の構成要素から成り立ち決定されるのかという、「過程」を基本とする構造機能的側面に着目し、「出会いのあいさつ」の言語行動を多角的にとらえ直すことを目的とする。出会いのあいさつでどのような言葉を用いるかについては、主として対人関係等の規範に基づく言語形式や変種選択の操作の過程に負うと考えられ、この操作をつかさどる条件的要素を「言語行動を構成する要素」としてとらえる。今回は大学生に対する質問紙調査の結果に基づき、あいさつの言語行動が、各要素にどう関係づけられ、あるいは言語内・外の条件にどのように制約されるかについて、機能的特徴の記述を中心的課題とする。

また、従来の構成要素の議論では、言語行動の形式化に向け、要素という概念の抽出が中心

的課題とされたが、実際の要素間の関連性や機能的異同については、これまでほとんど論じられてきていない。言語行動の形式化を実際に試みた Hymes (1972) でも、各要素の働きを (+) (-) で示し、その「連鎖」によって形式を記述する手法で、要素間の機能の相違までを示すようなシステムを持っているとは言えない。よって「それぞれの構成要素は、言語行動の成立過程において、各々違った側面に異なる機能を果たしているのか」という点についても、調査結果の分析を通じて検証していく必要がある。

2．研究方法・データ

2.1 方法

本稿では、出会いのあいさつを「人と人とが出会い、対面的コミュニケーションの開始時に交わす、儀礼的な言語行動」と定義する。出会いのあいさつは、コミュニケーションの開始を指示し、かつそれ自体で実質的なコミュニケーションを成り立たせることもできると考えられる。この前提で、出会いのあいさつに関与すると考えられる４つの構成要素を設定した。

①時間的要素	物理的時間に基づく４項目の時間帯 (朝・昼・夕方・夜)
②場所的要素	国立国語研究所 (1980) による公的場所・私的場所・外出先の３項目
③対人関係的要素	目上目下・親疎・ウチソトなどの対立概念に基づく 10 項目の相手 (親しい友人・あまり話さない同級生・先輩・後輩・隣人・家族・彼／彼女・先生・バイト先上司・用務員)
④状況的要素	意図的な出会い・非意図的な出会い (待ち合わせの有無) の２項目

これは、構成要素の中でもあくまで分析の観点として４点に限定したものであり、あいさつの言語行動を構成する要素自体は、この他にも様々に挙げられる[2]。これらが組み合わさって「朝 (朝の時間帯)、いつも待ち合わせている (意図的な状況) 授業の部屋で (公的場所) 親しい友人 (親しい関係) と会う」(設問項目 No. 4) のような場面が作られる。調査は、それぞれの要素の下位項目を１つずつ含んだ４要素から成立する場面を操作的に作成し、30 の場面を設問項目として、その場面で相手にどんな言葉をかけるかをたずねた。複数の設問間で、特定の要素の下位項目が異なる場合、回答結果を比較することで、その要素が言語行動上のふるまいにどのような働きかけを行うのか、すなわち機能的特徴としての制約的条件を考察できると考える。回答には、言語形式の選択肢を与えず、自由回答する方法を採る。その際「この場面ではあいさつしない (無視する)」と被験者が内省した場合に対応して「あいさつする・しない」という回答項目、およ

び非言語行動の回答項目も設けてある。

2.2 調査概要

調査は、1997年7月初旬に、東洋大学白山キャンパス(東京都文京区)構内で実施した。調査票は130部を配布し104部を回収した結果、有効回答数は101(男子51・女子50)、有効回答率は78%だった(設問の全文は本論文末に添付)。本稿では、そのうち非言語行動の回答を除いた、「言語形式」と「あいさつの有無」に対する回答をデータとして利用する。

2.3 データの分類項目

調査で得た多様な言語形式を分類した結果、以下の例を含む項目を定めた。

(1) 定型[3]　決まり言葉的なあいさつの言語形式とその変種

おはよう(ございます)・こんにちは・こんばんは・バイバイ・さようなら
ウ系(うっす、ういーす)・オ系(おう、おっす、おいーす)
チ系(ちーす、ちわっす)・ヨ系(よう、よっ、よっす)、やあ、どうも

(2) 準定型[4]　「定型」以外の、何らかの言及内容を持つ言語形式

「久しぶり」類・「何してる?」類・「お待たせ」類・「おつかれ」類
謝罪・質問(どうしたの?どこいくの?)・促し・非難・確認・労いの表現

(3) 呼称　～さん・(あだ名)・先輩・先生

(4) 間投詞類　ああ・おー・あら

得られた回答を分類しただけでも、出会いの場面で別れのあいさつ言葉が用いられたり、謝罪・質問・労いの表現がみられるなど、出会いにおける言語行動の幅の広さを示している。

3. 分析

3.1 分析の観点

各構成要素ごとに、下位項目間での回答傾向の違いを把握したうえで、それぞれの要素がどのような制約的条件を課しているかについて具体的な考察を加える。言語行動の成立には、主体の意向が深く関わるため、本稿では「あいさつしない(無視する)」という「ゼロ」の回答についても、言語行動の結果の一つとして積極的に扱う。なお「場所的要素」は、公的・私的・外出先の3項目間で差が見られず、あいさつの言語行動との間にははっきりした関連性が認められないと解釈された(土屋(1997))ため、以下では他の3要素について考察する。

3.2 時間的要素

一般に、定型のあいさつの中でも最も代表的な「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」は、それぞれ朝・昼・夜のあいさつ言葉として対立関係にあり、小林(1981)ではこれらを使用時間に対して制限的なあいさつ言葉、それ以外を非制限的なあいさつ言葉としている。

このように時間の推移と共に用いられる言語形式が変化することを、あいさつの言語形式に働く時間的用法制限ととらえた上で、上記３つの言語形式の使用を、各設問ごとに表１に集計した。ここでは「おはよう」「おはようございます」は朝のあいさつ言葉として「おはよう類」にまとめて扱う。

時間帯	設問	おはよう類	こんにちは	こんばんは
朝	1	77.2	0	0
	2	84.0	0	0
	3	60.4	0	0
	4	65.3	0	0
	5	75.0	6.0	0
	6	42.5	0	0
	7	29.7	0	0
昼	8	19.8	0	0
	9	-	-	-
	10	13.9	51.4	0
	11	6.1	7.1	0
	12	11.1	5.1	0
	13	4.1	0	0
	14	5.9	0	0
	15	58.6	0	0
	16	22.0	41.0	0
	17	29.3	8.1	0
	18	0	5.0	0
	19	3.0	6.0	0
	20	7.3	5.2	0
	21	18.2	3.0	0
	22	0	38.0	0
夕方	23	-	-	-
	24	0	29.0	50.0
	25	0	30.0	20.0
	26	-	-	-
夜	27	0	0	16.2
	28	38.6	3.0	30.7
	29	-	-	-
	30	-	-	-

(数値は各設問ごとに母集団に対する回答数を％表示した。
「-」表示の設問は時間を表すあいさつ言葉が回答になかったことを示す)

表１：時間を表すあいさつ言葉の回答率

調査票は、一日の時間の経過にそって設問を並べてあるので、設問番号順に１～７が朝、８～22 が昼、23～26 が夕方、27～30 が夜に設定してある。表１では、少なくとも時間の経過に伴って、「おはよう類」「こんにちは」「こんばんは」は大まかに使い分けられていて、時間的用法制限が機能していることを示している。しかし、すべての設問で「朝」や「昼」などと明確に時間帯を示しているものの、設問 5･10･11･12･16･17･19･20･21･28 と多くの設問で「おはよう類」と「こんにちは」は共に回答として現れ、設問 24･25 では「こんにちは」と「こんばんは」が共に現れている。さらに設問 28（バイト先で上司に会う）では「おはよう類」「こんにちは」「こんばんは」の３つが同時に回答として現れたが、アルバイト先では勤務時間帯にかかわらず「おはようございます」という固定的表現が習慣化していることが多く、やや特殊な背景が働くと考えられる。このように、実際には時間帯によって朝や昼のあいさつ言葉が厳密に使い分けられるのではなく、「おはよう類」と「こんにちは」、「こんにちは」と「こんばんは」がそれぞれ同じ時間帯に使われもしながら、使い分けられてゆくものと思われる。従って、時間を表すあいさつ言葉に対する時間的用法制限の働き方は、時間の経過に対して比較的ゆるやかな制約を行っているものと解釈される。

この他、非制限的な定型のあいさつの言語形式や、あいさつの有無との関係からも分析を試みたが、あいさつとの間には、目立った関連性は認められないという解釈にとどまっている。

3.3 対人関係的要素

(1) あいさつの有無との関係

あいさつ行動自体を行うか否かについて、「相手」別に各設問ごとの「あいさつしない」の回答数を集計し、その分布の違いから対人関係的要素の下位項目を次のようにグループ化した。

A「しない」の回答数が高い
(先生・あまり話さない同級生・用務員)

B「しない」の回答数が低い
(親しい友人・先輩・後輩・上司・隣人・彼／彼女)

C　A・Bの傾向にあてはまらない

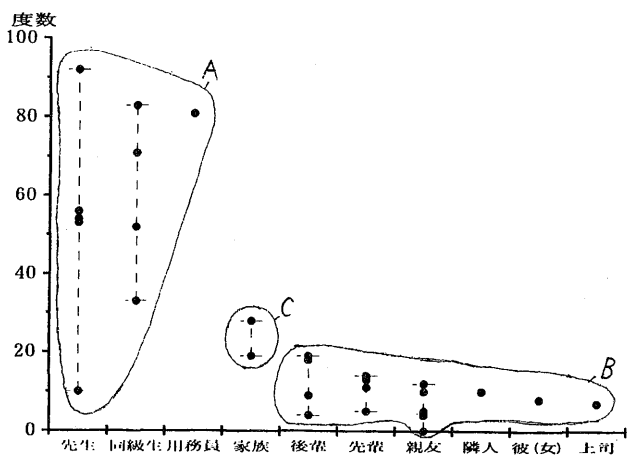

図１：対人関係別に見た「しない」の回答

ＡとＢの各グループの対人関係を比較すると、Ａは「親しくない」もしくは「個人的な知り合い関係にない」、Ｂは「親しい」もしくは「個人的な知り合い関係にある」相手であり、立場の目上目下の差には関連していない。２つのグループの違いは、自分と相手が親しく、個人的な知り合いであるか、いわば個人的な人間関係の成立程度の差に関わっている考えられる。つまりあいさつをするかどうかに関し、対人関係による判断が働いていると解釈できる。Ｃ(家族)が他のグループと違う傾向を示したことは、やや解釈しにくいが、Ａは「あいさつをしない」相手、Ｂは「あいさつをする」相手、そしてＣは「どちらとも言えない」相手とする意識の表れとして、相対的に違いを把握でき、「あいさつ行動の有無」は、対人関係的要素における「相手との関係の成立程度に対する評価」という点に制約されているといえる。ただし、「先生」が設問によって落差を持つ分布を示したことについては、対人関係以外の要素の影響を考慮しなければならないだろう。

(2) 定型のあいさつにおける待遇表現的用法制限①　時間を表すあいさつ言葉

以下では、対人関係的要素の違いによって見られる、あいさつの言語形式や形態の差を、「対人関係的要素にもとづく待遇表現的用法制限」ととらえた上で考察する。

時間的要素の項目で取り上げた「おはよう」「こんにちは」などの「時間を表すあいさつ言葉」について、相手によってどんな使い分けが行われているかを次表にまとめた(「こんばんは」は未調査分が多く除いた)。使い分けの特徴によって、４つのグループに解釈される。

	相手	おはよう	ございます	こんにちは
Ⅰ	隣人	0	84	29
	先生	0	23	22
	上司	0	39	3
	先輩	8	34.3	32.3
Ⅱ	後輩	21.2	0	5.7
	同級生	21.7	0	8
	彼／彼女	18	0	3
Ⅲ	家族	66	4	0
	親友	30	0	0
Ⅳ	用務員	0	0	5

「ございます」は「おはようございます」を表す。
数字は回答数(ただし、各言語形式ごとに集計した平均回答数のため、横軸の合算は母集団数にはならない)
なお、同じ相手に対して、複数の設問で同じあいさつ言葉を回答した場合、各設問の回答数の平均値を用いた。

表２：時間を表すあいさつ言葉の相手別回答数平均

この表のⅣ「用務員」に対しては、「しない」の回答が極端に多かったため、使い分けの考察には至らず、これ以外のⅠ～Ⅲについて考察する。

「おはようございます」はほぼⅠの(隣人・先生・上司・先輩)に対してのみ用いられ、その程度が大きい点で他とは対照的である。Ⅰはいずれも「目上」の立場にあたる相手であるため「おはよう」ではなく、より丁寧な「おはようございます」を使用する意識があると思われる。

ⅡとⅢは、「おはようございます」を用いない点では共通している。ⅡもⅢも、相手は「自分と同じか目下」の立場的関係であるが、その中でもⅢの「親しい友人・家族」では「こんにちは」が用いられない。一方、Ⅱに含まれる相手「後輩・あまり話さない同級生・彼／彼女」には「こんにちは」が用いられているが、その回答数はⅠに比べて1/5程度と少ない。ⅡとⅢの違いを親しさの度合いの差ととらえれば、最も親しい関係にあるⅢでは「こんにちは」はさらに使いづらいという意識があるものと解釈される。

このように対人関係上の違いによって、単に「おはよう」と「おはようございます」のどちらを用いるかという待遇表現的な形態の差だけでなく、「こんにちは」を用いるかどうかについても、親しさの度合いによるとみられる使い分けが生じている。従って、時間を表すあいさつ言葉を用いる場合、具体的な言語形式(形態)を選択する過程上で、対人関係的要素が機能してこれらの制約が行われるといえよう。

(3) 定型のあいさつにおける待遇表現的用法制限②「ウ・オ・ヨ系」と「チ系」の使用

定型のあいさつ言葉の中でも、「ウ・オ・チ・ヨ系」の言語形式は極端な省略形として、主に男子が用いるものと考えられているが、用いることのできる相手には、対人関係の違いによる傾向が見られ、「ウ・オ・チ・ヨ系」の使用は、次の表3からおおむね「自分と同等かまたは目下」であるかどうかに関わっていると考えられる。

用いられる	先輩・後輩・あまり話さない同級生・親しい友人・彼／彼女
用いられない	家族・隣人・先生・用務員・上司

表3：「ウ・オ・チ・ヨ系」を用いる相手

	ウ	オ	チ	ヨ
先輩	×	×	○	×
後輩	○	○	×	○
同級生	○	○	×	○
彼(女)	○	○	×	○
親友	×	×	○	×

表4：「ウ・オ・チ・ヨ系」の使用

また「ウ・オ・チ・ヨ系」の中での使い分けにも興味深い違いが見られた。表４は「ウ・オ・チ・ヨ系」の使用を相手別にまとめたものだが、「チ系」にあたる「ちーす、ちわ、ちわっす」は「先輩」だけに用いられ、逆にそれ以外の「ウ・オ・ヨ系」の言語形式は「先輩」には全く用いられていなかった。すなわち「先輩」と「先輩以外の相手」は、「チ系」と「ウ・オ・ヨ系」がそれぞれ相補的に用いられる点でちょうど対立関係にある。対人関係的には「先輩」だけが目上にあたることから、「チ系」は「ウ・オ・ヨ系」とは異なる待遇表現的用法である可能性がきわめて高い。これは「チ系」が「こんにちは」の省略形「ちわ」から派生した俗形的変種であるためと考えられる。前項の分析では、原形である「こんにちは」は、（隣人・先生・上司・先輩）のグループに対して多く用いられた、ややていねいな表現とされた。「チ系」は「ちわ」からさらに極端に派生しているので、形態はそれぞれ異なるが、「こんにちは」に近い内容を示すものと考えられる。

(4) 準定型のあいさつにおける待遇表現的用法制限

a. 謝罪のあいさつの言語形式

設問 16 は「昼に集まりがあったので部室に行くと先輩が来ていた」場面、設問 20 は「昼に講義ノートのコピーを頼んだ後輩と学生食堂で待ち合わせた」場面で、いずれも回答に「謝罪」の表現が見られた。その言語形式に着目すると、相手によって明らかに使い分けが行われていて、この場合「目上・目下」という立場的関係に対する判断が、表現の丁寧さの違いに反映したものと考えられる。

設問 16	先輩に対して	「(遅れて) すみません」類 (13)	(異なり語 6)
設問 20	後輩に対して	「ごめんね」類 (28)・「悪いね」類 (19)	(異なり語 27)

表５：「謝罪のあいさつ」の使い分け (カッコ内は回答数)

b. 質問形による言語形式

準定型のあいさつの中では「何してるの？」などの質問形による表現がしばしば見られた。回答に質問形が見られた設問の相手は (先輩・後輩・あまり話さない同級生・親しい友達) に限られていて、より目上の相手には用いられにくいと考えられる。

出会いにおいて質問形を用いるのは、何かを相手にたずねるというより、相手とのコミュニケーションそのものを目的としているためと考える。レストランで相手と偶然出会った時に、「何をしているのか」と質問する行為は、厳密に言えばおかしいが、相手との接触を図る意味

では「何してるの？」と様子を伺うのも、あいさつに含められる言語行動の一つと考えられる。

また、質問形が用いられる場合、表現の丁寧さに差が見られ、(後輩・あまり話さない同級生・親しい友人)の場合はすべて「何～してるの？」、相手が先輩の場合はすべて「何～てるんですか？」という回答だった。ここでも対人関係上の立場の違いによって表現の丁寧さが関係づけられている。

3.4 状況的要素

(1) あいさつの有無との関係

出会いが意図的である場合には、前もっていつ誰とどこで、何の目的で会うかが互いに認識されている点で、それ以外の出会いとは性質を大きく異にしている。「意図的」という状況では、相手との接触が約束されている点で、偶然すれ違うような場合とは、あいさつにも違いが見られるはずである。そこで、状況の違いとあいさつ行動の有無について、データを意図的・非意図的な出会いの違いに分けて集計した結果、表６では非意図的な出会いの場面では、対人関係によって数値の傾向は変わるものの、平均 34.0％が「あいさつをしない」と答えたのに対し、意図的な出会いの場面で「しない」と答えたのは 8.9％に過ぎなかった。このことから逆に、出会いが意図的であれば、かなり高い割合で「あいさつをする」という意識をもつことが分かった。ところで、あいさつの有無については、対人関係的要素との関連性をすでに指摘した。そこで、先の対人関係的要素の分析結果をあわせて考慮すると、「あいさつしない相手」のグループＡに含まれた「先生」の場合、非意図的な出会いでは平均 63.8％が「あいさつをしない」と回答しているのに対し、意図的な出会いを設定した場合(設問 19)では「しない」の回答は 10％に過ぎず、大きな差が見られた。これは、偶然すれ違うような場面では「先生」はあいさつする相手ではないと意識されていても、意図的な出会いでは、約束して会うという状況を重んじてあいさつすると判断するためであろう。すなわち、あいさつ行動の有無の決定においては、まず意図的な出会いかどうか、つまり状況的要素による出会いの意図性の有無が、対人関係的要素による判断に優先して機能しているという解釈が可能である。

	定型	準定型	しない	その他
意図的	42.4	32.5	8.9	16.2
非意図的	46.6	9.0	34.0	10.4

(数値は％を示す。また、「その他」には間投詞類や動作だけの回答を含める。)

表６：意図性の有無とあいさつ行動との関係

(2) 出会いにおける意図性の有無とあいさつの表現との関係

次に、意図的な出会い・非意図的な出会いという状況の異なりによって、回答の言語形式にどのような違いをもたらすかについて考察する。

上記の表6によれば、定型のあいさつの言語形式を用いたのは、非意図的な出会いの場面では平均46.6%、意図的な出会いの場面では42.4%と、出会いが意図的かどうかによって用いられ方に違いがあまり見られなかったが、一方で準定型のあいさつの言語形式は、非意図的な出会いの場面では平均9.0%、意図的な出会いの場面では32.5%であり、状況が意図的であるかどうかによって「準定型のあいさつ」に興味深い違いを示した。そこで、意図的な出会いの場面に対する「準定型のあいさつ」がどのような表現であるかを次に示す。

設問番号・設問内容	言語形式(カッコ内は回答数)
8(約束に相手が遅れた)	「遅い！・遅いよ！・遅いぞ！」(8)
16(サークルの集まりに遅れた)	「(遅れて)すみません」(13)
19(面接のためドアをノックした)	「失礼します」(77)
20(ノートのコピーを借りる)	「ごめんね(28)」「悪いね(19)」
21・30(会う約束をした)	「待った？(49)」「お待たせ(28)」
23(一緒に帰る約束をした)	「帰ろう」(19)

表7：意図的な出会いにおける準定型の言語形式

表7では、各設問によって、それぞれ異なる内容に言及しているが、これらが非難(「遅い！」)や謝罪(「すみません」「ごめんね」)、促し(「帰ろう」)などの表現をとっているのは、相手との言語的なコミュニケーションを開始するに当たって、定型のあいさつに優先して、相手に対する何らかの特別な言及が必要になるためと考えられる。具体的には、それぞれ意図的に出会うにあたって、相手を非難したり、謝罪したり、促したりする背景があると考えられ、1つの解釈として、各々の場面に固有な「言語行動の主体にかかる、コミュニケーション上の目的や負担」の存在が考えられる。この解釈では、例えば「待った？」「お待たせ」などは「相手を待たせたこと」に対する、気遣いの表現だが、それは出会った時に「自分が遅れた」ことについて、何らかの言及をする必要がある、という負担の認識による結果の表現ととらえるのである。逆に「遅い！」は遅れてきた相手に負担をかける、または相手に負担がかかっていることを明示する表現ととらえられ、こうした判断が「定型のあいさつ」に優先して「準定型のあいさつ」を導く制約的条件に関与すると解釈される。これらの表現は、いわゆる決まり言葉としてのあいさつの表現ではないが、各々の「出会い」に固有な言及内容をもつ点で「出会いのあいさつ」の一種と考えられる。

すなわち、意図的な出会いにおいて、出会いの目的や状況に依存した、「コミュニケーション上の負担や目的」が生じることによって、どのようなことに言及する(あるいは言及しなければならない)のかが大きく変わると考えられ、その結果として出会いのあいさつの言語行動を多様にしているとも言えるのではないだろうか。

4．分析のまとめ

以上の分析結果から、時間的要素・対人関係的要素・状況的要素は、出会いのあいさつの言語行動に対して、それぞれに機能の異なる制約的条件を持つと結論づけられ、「各々の構成要素は当該の言語行動が成り立つ過程において各々違った側面に異なる機能を果たす」ことが確認された。以下に各機能的特徴をまとめる。

【時間的要素】

(1) 時間を表す定型のあいさつ言葉の選択に対し、物理的時間という言語外的な条件が時間的用法制限として（比較的ゆるやかに）制約を行う。

【対人関係的要素】

(1) 相手との関係の成立程度に対する評価、つまり言語行動の主体内の態度・意向による判断という言語外的な条件により、あいさつ行動の有無の判断に対して制約を行う。

(2) あいさつが必要と判断された場合、言語形式の選択において、相手との立場上の関係や親しさに対する評価を、待遇表現的用法制限という言語内的な条件に置き換え、ふさわしいあいさつの言語形式(形態)の選択に対して制約を行う。

【状況的要素】

(1) あいさつ行動の有無の判断では、出会いにおける意図性の有無という、時間的要素や対人関係的要素とは軸の異なる言語外的な条件が、対人関係的要素に優先して制約を行う。

(2) 意図的な出会いでは、コミュニケーション上の目的や負担がある場合(正確には、言語行動の主体が「負担がある」と認識している場合)、定型のあいさつ言葉に優先して、その場面の状況に依存した、各々の目的や負担に応じたふさわしい「言及内容」を選択するという制約が働くと解釈される。

5．今後の課題

構成要素は、言語行動がどんな条件的要素から成り立っているかを記述しうるものではあるが、どのようにその要素が機能することによって成り立つかまでは示せない。つまり、あるあいさつ言葉はこの条件下で発されうる、という記述のよせ集めでは、「人と人とが話す行動」の相互作用にふみこんだ行動の過程は表せない。従って、あいさつの言語行動に対する構造的理解の指標となる仮説的枠組みを定め、各要素とその機能を体系的に把握していく視点も重要である。現在は南(1974)の「言語行動のモデル」を参考としているが、言語行動では、構成要素による制約的条件だけに律されているのではなく、主体的意向が深く関与するため、今後の分析を進める上で、あいさつの言語行動生成に関与する要素と、それぞれの機能のあり方を混同せずに記述できる、より緻密な決定過程の構造をもったシステムを仮定していく必要がある。

本稿では４つの要素から機能的特徴を把握したが、今回取り上げなかった要素との関連性、さらに男女差や、非言語行動の観点からの検討も重要な課題として残されており、分析が急務である。また、これらの機能的特徴が「あいさつ」の本質的な問題の一つであることを主張していくためには、異なる調査対象への追加調査を行い、検証を重ねていかなければならない。

注

[1] 単に形式的側面からあいさつを定義したのでは、「あいさつをしない(無視する)」というゼロ記号的行動について何の説明も加えられないことからも不十分である。

[2] 比嘉(1981)や甲斐(1985)、沖(1985)では日本語のあいさつの言語行動について、それぞれ異なる数の分析の観点をあげている。

[3] 小林(1981)では「定型」を「符牒的合図、極端な省略表現で、意味上は非命題的な表現」と定義している。

[4] 小林(1981)では「準定型」を「命題的な表現で、型通りながら関係の円滑化に役立つ意味内容をもつ表現」と定義している。本稿では「定型」以外の表現を広くここに含めている。

参考文献

沖久雄(1985)「あいさつ言語行動分析の観点」日本語学 4-8 明治書院
甲斐睦朗(1985)「日本語のあいさつ言葉の順序性」日本語学 4-8 明治書院
国立国語研究所(1980)「日本人の知識階層における話し言葉の実態」科学研究費研究報告書
小林祐子(1981)「日本人とアメリカ人の挨拶行動－出会いの挨拶－」東京女子大学付属比較文化研究所紀要　第42号
土屋頼子(1997)「出会いのあいさつの言語行動分析」筑波大学大学院 中間論文
比嘉正範(1981)「あいさつの言語学」「言語」10-4 大修館書店
南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
Hymes, D. (1972) Models of the Interaction of Language and Social Life."Directions in Sociolinguistics". ed. by Gunperz & Hymes, Holt. Rinehart and Winston.

【付録】調査票設問内容

(1) (実家で) 朝起きて、いつものように家族のいる居間へ入っていきました。
(2) 朝、登校しようと家を出たら、隣の家の人がたまたまいました。
(3) 朝、登校中の電車の中で後輩にたまたま会いました。
(4) 朝、いつも待ち合わせている授業の部屋で、親しい友達と会いました。
(5) 朝、駅から大学へ歩く途中、サークルの先輩にたまたま会いました。
(6) 朝、大学の正門付近で，ちょうど大学に来た授業をとっている先生に会いました。
(7) 朝、１限の授業に向かう途中、ふだんあまり話さない同級生とすれちがいました。
(8) 昼、授業の後ラウンジで待っていると、食事の約束をしていた親しい友達が来ました。
(9) 昼、大学の廊下を、授業を終えたばかりの見知らぬ先生が歩いてきました。
(10) 昼、授業が終わって食堂へ行くと、ちょうど先輩に会いました。
(11) 昼食を大学から少し離れたところへ食べに行ったら、その店に後輩がたまたまいました。
(12) 昼、大学の掲示板近くで、後輩にたまたま会いました。
(13) 昼、休み時間の移動中、朝会った親しい友達に偶然また会いました。
(14) 昼、大学の廊下を歩いていたら、ふだんあまり話さない同級生にたまたま会いました。
(15) (実家で) 昼まで寝過ごして、昼ご飯のころ家族のいる居間へ入っていきました。
(16) 昼、サークルの集まりがあったので、いそいで部室に入ったら先輩が来ていました。
(17) 昼、ゼミの集まりで待ち合わせた空き教室に行くと、ふだんあまり話さない同級生が先に来ていました。
(18) 昼、大学の廊下を、用務員が掃除の道具を持って歩いてきました。
(19) 昼、先生と面接の約束があったので、ドアをノックして先生の研究室に入りました。
(20) 昼、同じ授業をとっている後輩にノートをコピーさせてもらうために食堂で待ち合わせて会いました。
(21) 昼、デートの約束をした彼／彼女と、待ち合わせた駅ビルの入り口で会いました。
(22) 休日の昼間、友達と出かける途中、大学の先生が偶然家族連れでむこうから歩いてきました。
(23) 夕方、いっしょに帰る約束をした親しい友達と、待ち合わせた大学の門のところで会いました。(24) 夕方、家に帰ってきたら、隣の家の人にたまたま会いました。
(25) 夕方から渋谷に友達と外食に出かけていて、先輩にたまたま会いました。
(26) 夕方、大学の図書館で調べものをしていたら、ふだんあまり話さない同級生にたまたま会いました。
(27) 夜、サークルで遅くまで大学に残っていて、廊下で先生と偶然すれちがいました。
(28) 夜、バイトに行ったらたまたまその日来ていた上司に会いました。
(29) 夜、サークルを終えて帰ろうとすると、文化祭の準備で忙しそうな親しい友達をたまたま見かけました。
(30) 夜、サークルの飲み会があったので、近くの駅で親しい友達と待ち合わせて会いました。

英文タイトル：Sociolinguistic Contents and Their Function on Verbal Rituals of Greeting in Japanese